

【論文提出者】 社会文化科学研究科 人間・社会科学専攻
交渉紛争解決学領域
幸 史子

【論文題目】 在宅療養がん患者の日常生活支援のための RISK FACTOR（危険因子）
尺度開発

【授与する学位の種類】 博士（学術）

【論文審査の結果の要旨】

幸史子氏の論文「在宅療養がん患者の日常生活支援のための RISK FACTOR（危険因子）尺度開発」は、在宅療養を続ける若い世代のがん患者（65歳未満）にとって、末期がん患者を念頭に置く現在の医療政策は、かえって生活の質（QOL）を低下させる可能性があるとする知見に基づいて、在宅療養中の若年がん患者の日常生活上の QOL とは何かを明確にした上で、QOL を低下させる要因（RISK FACTOR）を抽出し、抽出された要因のリスク度を評価するための尺度を、リスク・マネジメントの考え方に方法的に適合可能なものとして開発することを目的とするものである。

第1章「背景と目的」では、がん患者支援策としてこれまで国が実施してきた対策の問題点を整理し、国の対策には若年がん患者への生活支援という視点が欠落していることを指摘する。続く第2章「看護師から見た在宅療養若年がん患者の日常生活上の QOL とその低下 RISK FACTOR」では、若年がん患者が抱える問題の全容を把握するために、医療機関での療養から在宅療養への移行を支援している地域連携支援室に勤務する看護師5名にインタビューした結果に基づいて、問題の所在を社会制度上の問題と日常生活上の問題とに分類した上で、患者自身の問題と患者を取り巻く環境的な問題とに区分する必要があることを指摘する。更に第3章「がん患者の QOL に関する文献レビュー」では、以上の問題に関してこれまでどのような検討がなされてきたかを確認すべく先行研究を調査した結果に基づいて、患者の社会生活上の QOL に関連する研究視点が著しく欠けていたことを指摘する。

第4章「在宅療養若年がん患者の日常生活上の QOL とその低下 RISK FACTOR」では、がん患者の日常生活上のリスク要因を明確にするために在宅療養若年がん患者7名に聞き取り調査を実施した結果を分析し、着目すべきリスク要因は生計、関係性（家族関係）、社会的役割の3点に絞ることができるとする。第5章「若在宅療養若年がん患者の QODL 低下のリスク度評価尺度開発」では、若年がん患者の日常生活上の QOL を QODL（Quality of daily life）と名付けて、生計、関係性、役割に関する QODL のリスク度評価を数値化して示すための尺度開発及びリスク度を可視化する概念図の作成について具体的な提案を試みる。第6章「QODL 評価者」では、上記リスク度評価を適切に実施するための要件を整理し、がん専門看護師がそのような要件を満たし得るかどうかを検討し、可能性がある結論付けている。

最後に、第7章「本研究の限界と今後の課題」では、評価尺度が妥当であるかどうかについて、また、現行の地域医療システムに在宅療養若年がん患者を支援する仕組みをどう組み込むかについて、更に検討する必要があることに注意を向けている。

幸氏の研究は、治療技術の発展、新薬の開発等に伴って近年増加傾向にある在宅療養中の若年がん患者を一人の生活者とする視点から、若年がん患者が日常生活を送る上でどのような支援を必要としているかを明確にした上で、がん患者が必要とする支援を患者の QODL 低下のリスク度として可視化して示すという、医療現場で実際に使用可能な評価方法を開発することを目的とするものである。リスク度が表わす実質的なリスクの意味についてはまだ若干吟味の余地が残され、また、評価尺度の妥当性に関する検証も十分とは言えない部分もあるが、若年がん患者が必要とする支援策を明確にした点、リスク度評価の尺度開発に一定の方向性を示し得た点に関しては、評価に値する成果があったと言える。

以上の所見により、学位論文として適格であると判断する。

【最終試験の結果の要旨】

上記の者に関して、平成26年1月17日（16：10～17：40）、文法棟小会議室において、口述試験を実施した。

また、上記の者は、同年1月25日（10：00～11：00）、文法棟A2教室において、学位論文について公開発表を行った。

その結果、上記の者は、提出された論文に関連する専門領域についてすぐれた学識を有し、自立して研究を行う能力が十分であると判断され、審査委員会は、博士（学術）の学位を上記の者に授与するに値すると判定するに至った。

【審査委員会】

主査	岡部	勉
委員	菊地	健
委員	石原	明子
委員	渡邊	功
委員	河村	洋子
委員	安川	文朗